巻　頭　言

藤　永　太一郎

昭和64年1月7日，昭和天皇が崩御された。昨年は多事の年であった。後記するように木村健二郎先生も亡くなられた。本研究所設立者である石橋雅義先生が亡くなられてから10年が経過したが，その間に菅原健先生，ついで太秦康光先生を失っている。この10年間にわが国の地球化学，海洋化学は大きく変貌し，昭和と共に一つの世代が経ったという気がする。

平成の時代が始まり，この学問領域も亦大きく新しい発展をする徴がみられる。筆者の高校時代の恩師であり，後に思想家として名声を馳せられた桑原武夫先生はルソーの研究の中において「学問は，時に深い淵をつくり停滞しているかに見えるか，やがて奔流して飛瀑を作る，というような経過を繰り返して発展する」と述べておられるが，海洋化学も今正にそのような画期的な時点に立っているように思われる。

時あたかも，常温における電解によって重水素からヘリウムへの核融合反応が生起するむねの成功が報ぜられた。当研究所のメンバーである紀本岳志氏らの硫化水素による糖・蛋白類の無機合成反応の発見もそのような希望をもたせる。電解といい，海水環境といい，何れも停滞しているかにみえる身近なところに未知の大きな新知識が秘められていることを知ることはビッグ・サイエンス漬けになっている世界への警鐘として興味深いものがある。

さて恒例に従って，本年も4月28日に海洋化学研究所主催にて海洋化学学術賞（石橋賞）の第4回受賞式ならびに受賞講演を含む学術講演会が行われることになっている。この為昨秋来授賞候補者の公募と所定の手続にもとづく厳正な選考が行われていたが，その結果今回初めてアメリカのChow博士（カリフォルニア大学，海洋研究所，ラホイア）に授与される事になった。同博士はワシントン大学海洋科学部の出身で石橋先生とも親交のあったトンプソン教授の高弟であり，かねて石橋先生の御業績を高く評価してきた同学の一人であった。また多くの日本人学者を知己に持つことでも有名である。IUPAC東京大会の折にも来日し京都のポストシンポジウムにおける招待講演者でもあった。

石橋賞受賞者として親しく来日し講演して頂けることは本研究所も亦格別よろこびとするところである。